

令和5年3月28日

第62号

鳥取県栽培漁業センター

(公財)鳥取県栽培漁業協会

昭和61年創刊時の復刻デザイン

今年度も順調な種苗生産・放流、しかし・・・

今年度の種苗生産事業も概ね順調に終わることが出来ました。年度当初のヒラメは、契約通りの尾数を淀江、米子、そして境港の地先に放流することが出来ました。サザエ・キジハタについては、海況等の影響により計画より若干遅れましたが、無事に放流することが出来ました。アワビにおいては、放流海域にムラサキウニの大量増殖によって餌料、生息場所が少なくなり、一部を秋放流に変更しなければならない状況でしたが、無事全てのアワビを放流することが出来ました。

今年も放流に当たっては漁業者の方々との調整を行い、様々なご協力を得ながら行うことが出来たことに対しまして、感謝を申し上げます。

さて、昨年2月に起きたウクライナへのロシアによる軍事侵攻によって、化石燃料等の価格上昇が起き、そのことにより電気料金が急激に高騰しました。一般家庭においても頭の痛い問題ですが、当協会でも深刻な問題であります。電気料金高騰が顕著となったころより、各職員は様々な省エネ対策を実施してきたところですが、対策を上回る電気料金の上昇であり、次年度の電気料金は今年度の電気料金に比べて大幅な増加となりそうな状況です。

そこで、次年度では更なる電力量削減方法を検討しており、一つの試みとして放流日の遅延を極力短くすることが出来ないかを考えています。

また、電気料金の他に餌料においても経験のない価格改定が行われました。円安・魚粉生産量の減少等によって、昨年秋に10%近くの価格上昇となり更に4月から10%程度の価格変更の情報

があります。今後、生産担当職員は餌料の効果的な給餌方法、配合飼料の大きさなどを検討してまいります。

電気料金・餌料単価以外でも料金値上げ改定がなされ、昨年と同価格の物はないのではないかと感じています。

以上のように、値上げの波がいつ収まるのか不明ではありますが、更なる種苗生産効率を高め、低コスト化に努めてまいります。海水の注水量、餌料の変更等は稚魚・貝の成長・生残に大きく影響を与えることから、まずは安定生産を第一に生産業務に取り組んでまいります。

令和5年度以降、使用電力量削減の一環として、放流時期の遅延が最小限になるように、漁業者の方々との放流時期・方法を調整させていただきたいと思っております。

今後とも漁業者のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(鳥取県栽培漁業協会 金澤)

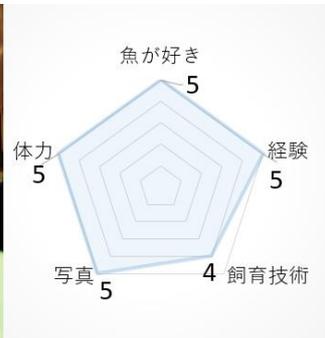


6月放流用のアワビ生産水槽

鳥取の元気な養殖業者たち

昨今のコロナ情勢による養殖魚の販売不振、電気代や飼料価格の高騰といった様々な逆風の中、県内の養殖業者の方々は粘り強く工夫を凝らし、地域の特産物を守り抜こうと日々奮闘しています。長年養殖に従事している方々のこうした懸命な姿に焦点を当て、生産者としての思いや仕事の魅力について取材しました。

和田 準一さん(86歳)
(私都養殖漁業生産組合 組合長)

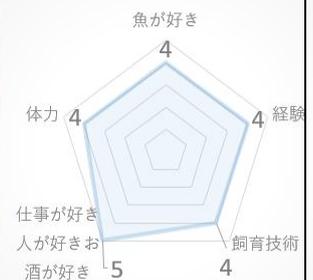


八頭町の私都川養殖生産組合の養魚場でヤマメやイワナを生産し続けて47年。和田さんは私都の顔というべき大ベテランだ。長年にわたり河川放流、地域イベント、旅館等に多くの魚を出荷し、地域振興に貢献してきた。組合発足当時に組合員は23名いたが、現在3名。ここ数年はコロナ情勢からイベントも軒並み中止となり苦境に立たされている。しかし、昨今のアウトドアブームに活路を見出し、地元八頭町のキャンペーンに自慢の釣り堀を売り出すことで成果を上げるなど和田さんは常に積極的である。仕事仲間にも恵まれ、「人は減ったが災害が起これば皆、いの一番に池に駆けつける覚悟のある者ばかりだ」そう語る力強い表情には生産者としての誇りと使命感を感じた。

そんな和田さんの趣味は幼少期から続けている写真撮影だ。これまで自然豊かな山村の風景や人の笑顔を数多く写真に収めてきた。「特に釣り堀に来たお客さんが初めて魚を釣った時の笑顔がいいねえ」と満面の笑みを浮かべて語る。元気の秘訣

を尋ねると、「私たちにはこの仕事があるからこそ、いつも健康でいられる」と、やっぱり前向きなご発言。和田さん率いるこの組合員たちの辞書に引退の二文字は存在しない。

松本 一好さん(60歳)
(三光株式会社 養殖場長)



松本さんは好奇心と行動力にあふれた人である。海面養殖経験で培われた知識とノウハウを活かし、15年前から産廃処理施設の廃熱を利用したキジハタ、マハゼ、フサイワズタの陸上養殖を手掛ける。こうした会社のSDGsの取組はメディアにも多く取り上げられ話題になった。早朝から丁寧に飼育管理をこなし、些細な気づきもすべて野帳に記録、分からないことがあれば即センターに相談と非常にマメに動く。丹精込めて育てた魚は、県内外の旅館や飲食店に出荷され、地元の料理教室や学校行事にも提供される。また、他企業や大学との共同研究も数多く、商品化、販路拡大などアグレッシブな取組は枚挙にいとまがない。

地元では子供たちにサッカーを教える鬼コーチ?でもある松本さんだが、仕事の魅力を尋ねると「自分が育てた魚を多くの人に食べて触れてもらって、その美味しさや魅力を伝えられること。何より、仕事を通して様々な人との出会いがある。仲良くなって酒でも酌み交わしたら最高だね!」と豪快に笑った。根っからの人好きである。

(丹下菜穂子、大里 純)

ウニの“集中駆除”による藻場保全活動に取り組んでいます！

近年、全国的にムラサキウニが大量発生し、県内全域でも食害による急激な藻場の衰退が確認されています（写真1）。各地区の潜水漁業者の方々にお話を伺うと、「どこもウニで真っ黒。磯場を歩けばウニが刺さってしまう。」との意見が挙がるほど。県内の漁業者の方々は、以前から水産多面的機能発揮対策事業において、年に2,3回のウニ駆除を実施してきましたが、ウニの高密度分布及び藻場の衰退が加速している状況です。実際に、令和4年4～6月に当センターが行ったムラサキウニの分布密度調査では、最大で1㎡あたり55個体ものムラサキウニが分布している場所も確認されました（図1）。そこで、令和4年度より県内14地区で漁業者やダイバーによるウニ駆除事業を開始しています（写真2）。本事業では、各地区で定めた区画内のムラサキウニを1匹残らず徹底的に継続的に駆除する“集中駆除”に取り組み、藻場の回復および磯根資源の回復を目指します。

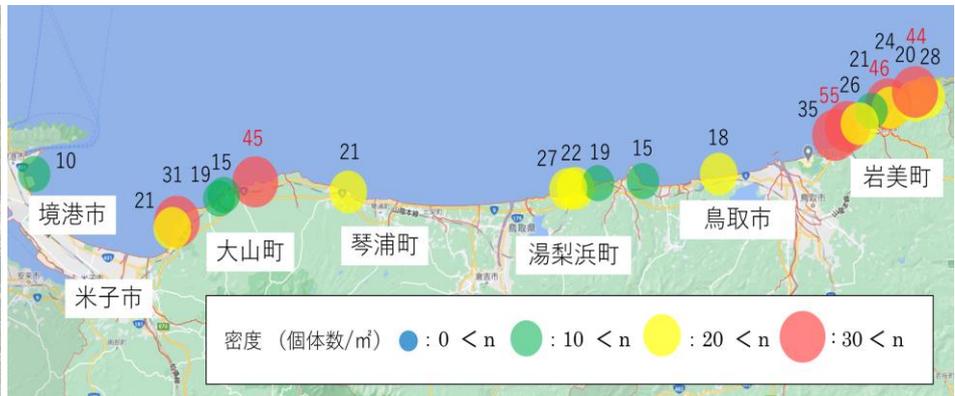


写真1. 大量発生しているムラサキウニ（赤碕）

図1. 事前調査で把握した駆除開始前のムラサキウニの平均分布密度（個体/㎡）

磯焼けガイドライン（水産庁，2007）によると、藻場を維持するためには、ウニの密度を1㎡あたり5個体以下に抑える必要があるようで、本事業ではこの値を目標としています。今年度のウニ駆除は、令和5年3月末時点で全ての地区で目標とする駆除回数を終えましたが、全地区とも集中駆除を行った区画については大幅に個体数が減少しました（図2）。今後当センターでは、ウニの分布密度を低いまま保つことが出来るのか、海藻は増えていくのかなど集中駆除の効果把握調査を進めていくことにしています。また、ウニを駆除した場所での効果的に藻場を造成するため、母藻設置（成熟した株を置いて種をまいてもらう）や海藻用増殖プレートによる種苗移植など積極的に取り組んでいきたいと考えています。

令和5年には、駆除区域を隣接した場所へ拡大し、駆除を継続的に続けていく予定です。漁業者の方々、ダイバーの方々、その他関係者の方々みなで協力して鳥取県の藻場をウニから守っていきましょう！（西村）

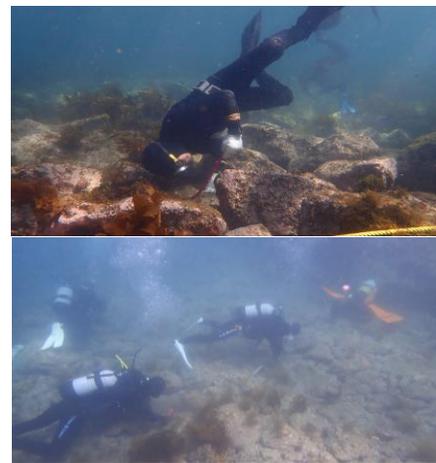


写真2. ウニの駆除の様子（浦富）



図2. ウニの駆除状況（田後）

【令和4年度 着任者紹介】

栽培漁業センター 所長
宮永 幸貴



令和4年4月1日付で栽培漁業センター所長に就任しました、宮永貴幸と申します。5年ぶり3回目となる栽培漁業センターでの勤務であり見知った方も多いと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

さて栽培漁業センターでは、令和4年7月に策定された第8次鳥取県栽培漁業基本計画に沿って、種苗生産と放流に併せて漁獲管理や漁場管理を行い沿岸資源の維持・回復を図るとともに、栽培漁業対象種の付加価値と地元利用を高めることで漁業収益向上や浜の活力再生に繋げていくことや、つくり育てる漁業の技術に先端技術を導入し、内水面漁業資源の回復や県内養殖事業の安定生産、漁業資源の育成場としての機能や地球温暖化対策の面で重要性が高い藻場の回復に向けた取り組みや調査研究を強化するなど、より多面的で環境にも配慮した栽培漁業を展開し、持続可能な漁業、養殖業の実現に向けて邁進する所存です。

漁協・漁業者の皆様におかれましては、引き続き栽培漁業センターが行うつくり育てる漁業の推進へのご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

栽培漁業センター 増殖推進室 主任研究員
福本 一彦



令和4年4月に県庁販路拡大・輸出促進課より着任しました^{ふくもとかずひこ}福本一彦と申します。

水産部局での業務は8年ぶりとなりますが、皆様のお役に立てるよう尽力して参ります。

担当は赤潮防除、ナマコ、イワガキ、アワビ、サザエなどの貝類増養殖や付加価値向上対策です。

わからないことも多く、色々お尋ねするかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

(異動者) (令和4年4月1日付)

氏 良介 栽培漁業センター 所長

⇒ 水産振興局 漁業調整課 課長

藤原 大吾 栽培漁業センター 増殖推進室 研究員

⇒ 水産試験場 底魚資源室 研究員